



子どもたちの子どもたちの子どもたちへ

木戸 直規 (きど なおき)

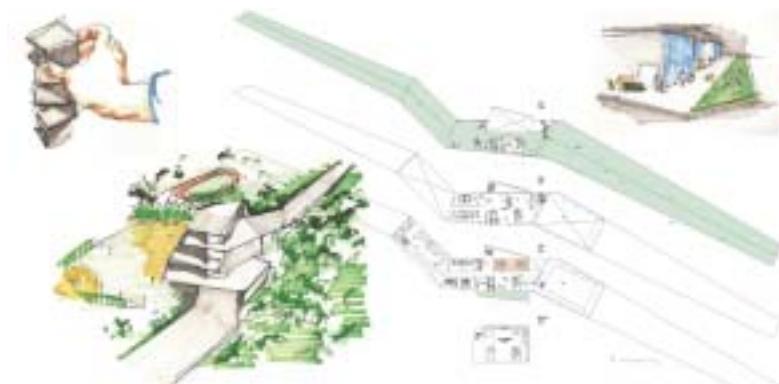
千葉大学 工学部 デザイン工学科



近年、都心部への回帰が進み、各地域において従来の環境が急速に変化している。その変化の過程においては多くの問題が存在し、中でも地域の人間関係の希薄化は、マナーや安全面、さらに言えば暮らしの豊かさにおいて、住民に影響を与えていていると考えられる。

対象地とした神田多町は古くから市場文化発祥の地として栄えてきた。しかし、高度成長期以降オフィスビルやワンルーム共同住宅の建設などによって地域住民同士の関係は薄れている。

本設計では、路地という共通空間を見つめ直すと共に、住民の居住意識を向上させる居住形態を模索し、地域の活性化につながる集合住宅を提案する。



[講評] 緑の広場に組上げられたダンボールの檜と、はらはらと繊細な線が背景の空に消えてしまいそうな断面図の美しい透明感が印象的な作品である。東京湾のごみ処分場の埋立地に、学校を作りここを起点に森作りを行ってゆく、ここで育って行く子供たちに環境問題という教育的意義も持たせるというテーマは明快である。「ごみ埋立地が植林されてやがて森の表層になる、というギャップに違和感を覚える」という作者が、子供たち、教育という最もデリケートな環境をぶつけで起こる様々な問題をポジティブに捉えて取り組んだ姿勢に共感する。

雛と親鳥に見立てた建物の形態や、コの字型断面のプロ

ックを90度振りながら組上げることで各層に異なった眺望を与える構成は巧みであり、地下に浸出する水の浄化システムと利用等技術的提案も評価出来る。

しかし、ごみ埋立地に作るということは臭気やメタン瓦斯を始めもっといろいろな問題を孕み、解決すべき課題もあるのではという疑問、特に「ごみの上に作る子供達の生活環境は例え森の緑で覆われたとしても……？」という違和感が拭えなかった。・・・森の学校というテーマでこのまま発展させたほうが素直に共感できたという審査員が多数であった。しかし作者のデザインセンスとプレゼン技術には全員が感銘を受け、将来に期待したい。

(審査員：柳田富士男)